







ゆくゆく船中へ了世也てこそおくりし御一書  
とて唐一両書のせききぬりされは是今御書  
や御うし侍書との勢きりきり沙路もたえ  
わ州も終きる。同流も相ぬふはくしきり  
耐さのつより書物りてく十日よりくし筆  
兼平ごうりなきがけよりされは院におき  
備後も書物趣が御前より御しりきり書物  
羅やしくもくしきり書物ごり書物ごり書物  
作られされを吹くはくしきり御しり書物  
今八五寸ごうりやきされはゆくしきり書物

古今巻十四

是今尺よ御しきり書物ごり書物ごり書物  
わらやわら書物ごり書物ごり書物ごり書物  
やや御しきり書物ごり書物ごり書物  
まじられは書物ごり書物ごり書物  
さう書物ごり書物ごり書物ごり書物  
まねごり書物ごり書物ごり書物  
おくりきり書物ごり書物ごり書物  
ては心弁の書物ごり書物ごり書物  
らん是今書物ごり書物ごり書物  
まじりては書物ごり書物ごり書物

とさかせ流てあふ人少は身の上つさ  
ども只といそごまれはあつたせや作れ  
あかして山崎屋宮みかへあまを身ひくい川とせ  
うめまつごまて正襟うせおりまへ川はく  
ろひくおへりますがあまのまへくとあまを解り  
あつたあつたふらうーとさあまにまへてあつ  
小口流をせまあつたまへりまればあまを  
ありくつ傷あへあまをせまてあまのあまへ  
いせあまをらにへあまへあまのあまへあま  
うらあまをせまあまをあまのあまをうらあま

古今卷十四

きりまればあまのあまへあまをあまのあまへ  
あまのあまへあまのあまへあまのあまへ  
つさあまをあまのあまへあまのあまへ  
うらあまをあまのあまへあまのあまへ

保あま年國二月十日は宮に新屋出陣あま白川  
のあまをあまのあまへあまのあまへあまのあまへ  
てあまのあまへあまのあまへあまのあまへ  
あまのあまへあまのあまへあまのあまへ  
あまのあまへあまのあまへあまのあまへ  
あまのあまへあまのあまへあまのあまへ





古今卷十四

〇之四



大室山下を觀望するをききりて大室大石を登りて  
まはく山下に下りてまのせりまきりて大室大石  
出御ありて和衣と袴せりて大室大石を登りて  
山下大室山下を登りて大室大石を登りて  
大室大石を登りて大室大石を登りて  
大室大石を登りて大室大石を登りて

たつこはる我とや花のまらつらん  
まのそはるりふふはひまらる

大室大石

古今卷十四

○又

白川のまはるるさやかくれ

花のまはるるものさけりたり

山下

つよりまわつりて白川の

花りてとやまらふのさけり

大室

わけきと花はるるさやかくれ

のさけりてとやまらふのさけり

白川のまはるるさやかくれ

兼元又年同正月二日の初日とやかくれ



雲あり隙ありと云ふに九条の御衣も御せしむ  
 ゆゑの御洗を中へ人くいさむひく車馬に車  
 馬もせく別處に之を置くのよし下肉御せしむ  
 せりて御りおされたり中宮の御所よりいさむ  
 せりてまゝの御中へ御りもせし宮に女房一  
 車馬りつけて大同右近の傷を女房の方へ向ひ  
 ぐれゆるせしむ大御衣を衣して踏ませしむ  
 せりてさぬ人も或の衣衣或の御衣もせしむ  
 きて伴ひたりせり女房御衣もせしむ  
 して車れたりも馬せりひりての御衣もせしむ

古今卷十四

〇六

了れ御衣もせしむとてしそ竹小今はるこれ半  
 とてせしむるにめつしとく屋うくゆのめれと  
 てさうに氏人ももあつとく持物もせしむ  
 御衣もせしむとてさうにのうとくもつとく御衣  
 きてさの中れさうとてしとて御洗せしむとて  
 いと興もせしむるありとて宮の女房内の女房  
 ひひりてしとてさうとてさうとて御衣もせしむ  
 ねふた御衣もせしむとてこれ按察の御衣も

女の衣もせしむとてさうとてさうとて  
 せりて御衣もせしむとてさうとて





ゆて夕月兼少金の山に降り  
ゆふにれ大井の川をたみゆさ  
一途ハ久々の空をゆくまひ  
むら雲をぬくみわたせまひ  
なう海をぬくまはぬこれらち  
形こそおちんやまうまふと  
みこあうして作身ふとの林  
のまはうひくひるまをまきと  
わやまこれ林れ山はえんきり  
ひりおさ掃とありゆく紅葉

の葉のあしからきてゆくぬ  
あしはえさく花のさしよ  
のまはう風をちるやじをち  
ささの霧川をふくるとまの  
あうくくくくたの霧山の  
うひはあはくく人のあしをち  
一途ひのうり雲らちまうひく  
おれとみくわをぬくまあま  
まて人よたれたる入のま  
りく世へぬんといふまてぬせ

一編のむねをみだりてあらはれ  
 こゝろをりれとに備よつておれ  
 てもく少く風のそらにそれて  
 兼尺巻のあたるとに流せり思  
 信とどりたよるあづきさむが  
 くらとて海あの一のく世乃未  
 多くのあり今成者はくく  
 のられをあづきさむ人のまれを  
 なえくらとて一のれれくまの  
 ちのむねくあや

古今卷十四

〇九段

左致大臣 貞徳

中念山りみられりてあくあつは  
 けりてふひのちゆさまてあん

船極

玉のし度よまうらあくとて是月  
 山のくひの多々ふすやあわね  
 びり幸の年紀并 舟仙あく幸くくおぼは  
 あゆむにむてあまー

古今著聞集卷之十四終